

コラム 日食余話

編集委員長 作花一志

わが国最古の日食の記録は『日本書紀』に載っている推古三六年三月二日（=628年4月10日）のもので、その記述は「日有蝕盡之」のみです。このときの皆既帯は日本列島上にあったか？それとも外れて太平洋上か？は議論が分かれているようです。日食が起こるのは新月の時、旧暦では一日になるはずなのに、二日とはおかしいですが、それはさておき、この日食の5日後に最初の女帝である推古天皇は75歳（当時としては非常に長寿）の生涯を閉じるのです。何かアヤシイですね！このとき人々の間に「日が隠れて女王が亡くなる」と言われてきた微かな記憶（いつのことか女王の名前すらわからなくなっていた）が蘇ってきたのではないのでしょうか？その女王とはもちろんヒミコ、推古女帝より約400年も前の人……。ここから先の推理は読者にお任せします。

源平合戦のひとつ、水島の戦いは珍しく平氏が勝ちました。時は寿永二年閏十月一日（=1183年11月17日）、場所は岡山県倉敷市、今は工業地帯、MizushiaLinesの発生地と言うほうがなじみがありますね。戦い中に日食が起ったため、それまで優位に立っていた源氏側が驚きのあまり逃げ出したという話が『源平盛衰記』巻三十三にあるそうです。平氏方は予め日食のあることを知っていたが、源氏方（実は無学な木曾義仲の兵）は知らなかったのでびっくりしたのでしょう。金環食だから真っ暗にはならず「天俄かに曇りて日の光見えず」という表現はオーバーです。義仲は京へ逃げ帰りこの後、急速に低落していきます。

この時の金環食は山陰山陽四国で観られました。京都では部分食ですが、9割以上欠けたはずです。

本能寺の変は天正十年六月二日（ユリウス暦では1582年6月21日）の早朝です。旧暦二日といえば前日は新月です。ひょっとしたら？そう実は日食があったのです。p55の日食ソフトで再現すると、京都では15時半ころ6割欠ける部分食が見えたはずですが、日食の記録はない！ある公家の日記によると、この日は雨で、夜になってから晴れたそうです。ところが朝廷の陰陽師が細々と作っていた『天正十年具注暦』には、ちゃんとこの日の日食が予告されているそうです。だからこれを見て日食を知っていた公家もいたでしょう。また晴れていたら日食を見て中国出陣を延期するよう信長にアドバイスした公家もいたでしょう。信長が京都に来たのは明智光秀を従えて、毛利攻めに出発するためだったのですから。しかし迷信嫌いな信長のこと、たとえ日食を見ても人の忠告など聞かなかったでしょうね。

この小文執筆には以下の本を参考にしました。

斉藤国治『宇宙からのメッセージ—歴史の中の天文こぼれ話』雄山閣 1995